

土屋 純・兼子 純編：『小商圈時代の流通システム』古今書院、2013年3月刊、241p., 3,000円（税別）

私たちの身の回りの商業に目を向けると、近年急速にネットスーパーや購入品の宅配サービスの案内が目についたり、比較的小規模な小型のスーパーが増加したり、スーパーの惣菜を扱うコーナーが充実度を増したり、あるいはドラッグストアが増えるだけでなく、取扱品目がスーパー並みに多様化していることもごく当たり前の光景となっている。本書は、こうした流通業をとりまく近年の変化を的確に捉え、構造変容といった大きなフレームワークから考察した好著である。

具体的に中身を見ていこう。まず、第1章「小商圈時代とは何か」（箸本健二）では、深刻な少子高齢化、長引くデフレ、人口の都心再集中、所得格差の拡大などにみられるように、これまで拡大を続けてきた均質な郊外の市場が近年大きく変貌していることを指摘している。本書のタイトルにも使われている小商圈とは、これまで長らく流通システムを支えてきた人口増加と経済成長という基盤が岐路にさしかかり、少子高齢化に伴い消費と都市空間のダウンサイジングが起こり、買い物圏が縮小することである。さらに小商圈とは、商圈縮小という量的な変化のみならず、多様な消費者が多様な場所で混在する市場のモザイク化あるいは細分化が同時に起こることを指すという。この第1章では、本書を貫く重要用語の概念が整理されており、2章以降に続く様々な事例を紹介する各論の理解を助けてくれる。

第2章「総合スーパー店舗網の再編成と大都市圏での市場深耕」（安倉良二）では、2000年以降の総合スーパーの出店戦略について、店舗網の再編成過程および大都市圏における市場の「深耕」戦略（既存の出典地域で異なる業態店舗を展開し、

地域市場の新たな需要を掘り起こすこと）の視点から詳しく説明されている。第3章「食品宅配事業の多様化とネットスーパー」（池田真志）では、消費市場に対して低価格の商品を供給することを追求してきたチェーンストア業界が、決して高効率ではなく、利益も少ないとされる食品宅配事業やネットスーパーに近年相次いで参入している背景が考察されている。第4章「家電小売業の小商圈への対応」（兼子 純）では、家電小売業は、全国に出店する家電量販の大手への系列化が急速に進行し、規模の利益を活かした大量仕入れ・販売により、メーカーよりも強い価格決定力をもつようになってきていること、また顧客の高齢化が進むことで販売後のアフターサービスの重要性が増していることを指摘し、「まちの電器屋さん」と呼ばれて来た小規模な家電小売業の新たな役割と営業戦略についても紹介されている。第5章「ドラッグストアの再編成と業際化」（駒木伸比古）では、薬事法の改正により出店規制が緩和されたドラッグストアが近年急速に店舗数を伸ばしていること、業界の再編成過程、さらにはスーパーやコンビニといった他業態との併設・合体が進む状況（業際化）の動向が考察されている。第6章「転換期にある出版物流通」（秦 洋二）は、長らく日本の出版文化を支えてきた委託返品制度と再販売価格維持制度（再販制度）について、大手取次会社についての詳細な事例が紹介されており、読みごたえがある。一方で、2000年代以降はネット書店が次々と誕生したことにより、出版物の流通は急速に再編成されているという。

続く第7章「フードデザート問題の拡大と高齢者の孤立」（岩間信之）では、経済的・社会的格差の拡大によって栄養価の高い食料品が入手困難な人々の増加が日本でも深刻化していること、第8章「食品流通と食品情報の流通の乖離」（荒木一視）は食品偽装の問題を取り上げて、食品流通の安

心・安全問題を論じている。第9章「過疎化地域における流通システムの維持可能性」(土屋 純)では、事例地区である名護市以北の沖縄県北部には共同売店と共同配送という2つの流通チャンネルが併存しており、それぞれの長所と短所が論じられている。また、第10章「離島における医薬品流通の維持」(中村 努)では、公的医療制度の基盤となる医薬品の適時配送を支えてきた医薬品卸売業に焦点を当て、悪天候や本土へのアクセス条件の悪さを克服する努力が描かれているが、人口減少が続く離島においては医薬品需要も減少しており、医薬品卸売業の企業努力だけでは割高な配送コストを負担するのは困難を極めており、効率化を追い求める20世紀型流通の限界が報告されている。

第11章「2006年のまちづくり3法改正と地方都市における大型店の立地変化」(荒木俊之)、第12章「大型ショッピングセンターの立地多様化と出店用地」(伊藤健司)、第13章「大型ショッピングセンターの立地が周辺居住者に及ぼす影響」(湯川尚之)は、2000年代を通して急増した大型店をとりまく諸問題を扱っている。2006年に行われたまちづくり3法の改正と大型店立地の関係、大型店の出店用地の確保、大型店と地域社会との関わりについて詳細な考察が展開されている。

本書を通読した後の評者の率直な感想は、「さらに先が知りたい」であった。各章の冒頭に添えられたリード文は内容をよく要約していてわかりやすい上、各事例も今まさに現在進行形でみられる最新のものがタイムリーに取り扱われていて大変勉強になる。しかし、本書で取り上げられている様々なトピックスが複合的に展開する事例地区を選定して、小商圏時代の流通システムの統合モデルを見たいという衝動にも駆られる。中山間地に限らず、中小都市の郊外でも高齢化が進展することで小売店は減少してフードデザート化し

ている。その一方で、郊外を中心に、業種のみならず業態までもクロスオーバーした大型のドラッグストアが急伸している。本書では取り上げられていないものの、編者らの研究グループは以前よりチェーンストアやコンビニ、ホームセンターなどの立地動向に関する研究を活発に発表してきた実績がある。せっかく当該テーマを専門とする豪華なメンバーが集まった企画なのだから、既存文献と本書の知見を統合して、商業の地域構造を総合的に論じた深い議論を展開する「まとめ」の章が巻末に置かれていてもよかったかもしれない。

ないものねだりをしたが、これは本書の価値を損なうものではない。大店法、まちづくり3法、薬事法など、エポックメイキング的な法改正の直後には、堰を切ったように新業態の出店が相次ぎ、業界地図があつという間に塗り替えられる。本書では、事例となる企業の経営論だけを分析するのではなく、地図がふんだんに用いられており、身の回りの地域で起きている現象をより広域なスケールで空間的に理解する上で大変に有効である。また、近年の東海地方でオープンしたショッピングセンターの大部分が工場跡地であり、さらにその多くは繊維工場の跡地であるとの指摘は、ものづくりの中心地としての東海地域独特の地域的条件を見事に切り取っており、産業空洞化の鏡と考えることができよう。また一見ではネットスーパーが急拡大をしていると映る反面、当該事業を展開するスーパーの多くでネット販売や宅配事業は利益には殆ど貢献していない点や、そもそもサービス自体が店舗から数キロ圏内といったごく狭い範囲でのみ行われているに過ぎないことを指摘している点などは、まさに地域を総合的にみることを得意とする地理学者ならではの洞察力の賜物と言えるのではないだろうか。本書にはこうした鋭い指摘が随所にあふれており、変化の早い現代の流通システムを理解する上で有益

であることは言うまでもない。

本書は評者の書棚の一番取り出しやすい位置に
しばらく置かれ続けることになるだろう。

(堤 純)